

# 多様性を大事にする社会とその思想

哲学者 内山 節

多様性を認め合う社会という言葉を使うと、多くの人は一人一人の違いを受け入れていく社会をイメージするだろう。私たちの社会には、国籍、性別、年齢といったことだけではなく、さまざまな違いをもつ人々がいる。それらすべての人々が、排除されたり追い詰められることなく暮らしていける社会が、多様性を大事にする社会なのだ、と。

振り返ってみると、この考え方は近代社会の理念のひとつだった。すべての人が自由や平等を享受できる社会をつくる、近代社会はこの理念を掲げることによって成立したといってもよい。ところが、にもかかわらず近代化したはずの社会には、さまざまな差別や排除が生まれつつけていた。今日でも性的マイノリティに対する差別、偏見が、あたかも「正論」であるかのごとく発表されたり、ヘイトスピーチ、国家主義的な人種差別などが世界に蔓延しているといってもよい。

近代社会は理念としては自由や平等を掲げても、社会の実態としては少数者に対する差別や偏見、排除が存在しつづけたといってもよい。

とすると、なぜこのようなことが起こるのだろうか。近代形成期であるのなら、前近代的な精神をもっている人たちがこのような問題を起こすのだと言っていれば、それで済ますことができたのかもしれない。しかし現在ではフランス革命から250年、明治維新から150年ほどがたっている。何代にもわたって近代社会で暮らしつづけた人たちのなかから、多様性を否定する動きが生まれつつけているのである。とすると私たちはこの問題を、「封建的な精神の持ち主」の問題として片付けることはできないはずなのである。そうではなく、近代社会の原理のなかに、このような現実を生み出す基盤が成立していると考えた方がいい。

近代社会は個人を基調にした社会であることを基本にしている。その上で、論理としては、個人の差異を認め合おうということになるのだけれど、個人の社会とはそれぞれの自己が社会の中心として位置づけられる社会のこともある。一番大事な個人、それは自分自身であるといってもよい。つまり他者には自分ほどの価値はない。ところがその他者や他者がつくりだ

している社会、企業などは自分の価値を尊重しようとはしない。そう感じるとき、自己への社会の評価に対するいらだちが生まれる。そのいらだちが自己肯定をもたらしてくれる論理を探させる。自分は正しく、間違っているのは社会だという論理を、である。それが差別や偏見、不寛容などの温床になっていく。

個人の社会は満たされない個人を生み出す以上、差別や偏見を生み出すマグマを内蔵しているのである。自己肯定を求める意識は、他者否定の意識と奥の方で繋がっている。

とすると私たちはどう考えればよいのだろうか。さまざまな違いをもつ人々を認め合うとは、単なる個人の尊重ではなく、人々が共有するものをもっているからこそ成立するものだったのである。たとえば家族をみてみよう。家族はいろいろな違いをもったメンバーによって構成されている。一人一人の考え方も完全には同じではないし、性格や得意とする分野も異なっている。ときには障害者や性的マイノリティが家族にいることもある。それでもその違いを個性として尊重できるのは、家族としての共有された世界をもっているからである。

かつての共同体もそうだった。共同体のメンバーたちは、地域共同体であれ同業者の共同体、文化・信仰にもとづく共同体であれ、共有された世界をもっていた。だからこそその内部では多様性を認め合うことができた。

個人の社会が個人を尊重しようというのは、大きな幻想なのである。それは多様性を尊重しようという思想によって成り立っているにすぎないから、その思想を保有しなければ、本音としての差別や偏見、不寛容が姿を現してきてしまう。そうではなく、ともに生きる世界をもっている、ともに生きるという共有された世界をもっているからこそ、その内部に多様性があることを認め合うことができるのである。

多様性を認め合う社会をつくるという課題は、個人の意識の問題ではなく、ともに生きる社会をいかにつくりだしていくのかの方にあると私は考えている。

(うちやま たかし)